

きて來にければ幸伯ふた、びゆきて、彼五人の中、亭主と外一人の即死したれば、療治届かず、殘る三人はその腹いづれも大鼓のごとくにはれたれども、命運や竭きざりけん、からくして順快しけり、その、ち幸伯は、江戸へ出府せし折か、る事にや、不思議に命を助かりしとて、朋友某に物がたりしなり、○中略

文政八年乙酉六月朔

乾齋主人識

〔甲子夜話 五十九〕伊澤辭安福山侯ノ醫ノガ話ニ、抹茶ハヨク諸毒ヲ解ス、明礬モ亦同ジ、或トキ某ノ寺内ニ竹林アル處蛇多ク栖ム、其地ニ蕈生ジタルヲ三人シテ採食ヒ欲レバ、即時ニ大腹痛シテ悶亂ス、ゾノ中一人ハ恒ニ豪氣ナルモノユエ、彼ノ邸マデハ還リ吐血シナガラ、辭安ガ所ニ到リ治ヲ乞フ、安コレヲ聞テ、抹茶ニ明礬ヲ合テ服セシメジカバ、吐血ハ止テ瀉血セシガ、遂ニ腹痛歇テ、尋デ平愈セリトゾ、奇効ノ物ナリ、

苔蕨

苔ハ、コケト云フ、樹木、岩石、若シクハ屋瓦等ノ陰濕ナル處ニ叢生スル微細ナル植物ノ總稱ナリ、

蕨ハ、ワラビト云ヒ薇ハゼンマイト云フ、並ニ到ル處ノ山野ニ生ジ其嫩芽ハ採リテ以テ食料ニ供ス、尙ホ此類ノ植物ニハ、忍草、石葦、石松、卷柏等甚ダ多シ、

〔倭名類聚抄 二十〕苔 陸詞切韻云、苔音囊、和名古介水衣也、

〔東雅草 十五〕苔コケ 倭名抄に、陸詞切韻を引テ、苔はコケ水衣也と註せり、此にコケといふもの、水衣をのみいふにもあらず、舊事紀に、八岐大蛇の事をしるされしに、其身生蘿と見えて、古事記に